野生動物と共生する、美し国の創りかた

Ⅰ．農山村の動物たちとのいい関係づくり

１．農山村の動物たちの表情

農山村は、高度経済成長期を境に急激に変貌し、本来の機能を失いつつある。都市居住者である私であるが、心に痛みを感じている。まず生き物の様相から見てみたい。

① シカ。戦後食料難時代の乱獲がたたって激減していたが、今や霧島連山の鹿の頭数は、5～６千頭か、などと言われ、山に入ると頻繁に出会う状況になった。また希少種の植物を食い荒らし資源の枯渇に拍車をかけている。鹿が増えすぎたのは天敵のオオカミがいなくなったからだが、今や代わってハンターが行わなければならない。(撃ち取った耳を持参すると一頭につき５千円)。

② イノシシも農山村の畑を荒らし、観光地では観光客を襲ったりしている。特に戦後、自然林から杉、檜の針葉樹に代わってから好物のドングリ、山芋等が減って里に出没するに至った。

③ 和牛。一方、和牛は、かつては農家一軒一軒が手塩にかけて一頭ずつ育てていた。飼料は、田畑の草、神社周辺の笹、冬には稲藁であった。今やその資源は放棄され、海外からの輸入に頼って流通部門を含めすっかり工業化してしまった。少なくとも口蹄疫問題はここに原因がある。豚は、かつては家庭からの残飯とサツマイモのデンプン滓を混ぜておが屑を燃料にしていたが、今や、双方とも廃棄物となっている。せめて良心的な家庭から選別されて出された残飯は、飼料として有効活用したいものである。それら、和牛も豚も頭数において過去の比ではなく、世界十数億頭の牛のゲップは大量のメタンガスを発生している。

④ 他方、米の生産調整のための休耕田、耕作放棄地、それに、⑤ 山林も手入れが行き届かず荒れたまま広がり、水資源涵養を妨げ、災害を助長することとなっている。水源地が適正に管理されてこそ、下流域の都市住民は災害、水資源に対して安泰であることを忘れてはならない。

⑥地方の空き地、公園などは人手が足りないので草ぼうぼうだ。ところが、この点に限れば、島原半島で、「エコヤギ羊大作戦」（夢アイデア事業に提案されたアイデアで、農業高校のヤギや羊を公園、空き地に放して雑草を退治させる。それから派生する様々な効用を追求）が始まって夢と希望が膨らんできた。だが、①～⑤までの総合的な解決策には及んでいない。

２．総合的な解決策への挑戦　　～　需要と供給を国内資源でまかなうことを目標に！

１）荒れ地と放牧の組み合わせ。我が国は**草資源大国**である。すなわち、春から秋まで降雨と陽光に恵まれ、次々に草は生えてくる。問題は、資源需要が潜在したままで供給体制もできていないこと。つまり、刈り手と需要者の間の架け橋がなく浪費されている。①まずは中山間地に牛の放牧を始めよう。(成功事例は高千穂町。8頭の実績では牛舎飼育よりも頭当たり６万円浮いた。また、イノシシが近づかないとの効用もあるようだ)。②ゆくゆくは、草資源の需要地と供給地の情報をむすびつける草産業を興し、もって草飼料の国内調達率を高める。

２）シカもイノシシも天敵不在だから過剰になる。そこは人が天敵の代役となって適切な個数管理が必要だ。霧島山の麓では、シカの囲い込みによる牧場化の構想が進んでいる。だが、これも、需要の掘り起こしが成否を左右する。イノシシ肉、シカ肉の生産、流通、消費の円滑な循環

タイトル：野生動物と共生する、美し国の創りかた、対象地：-、分類：まち全体の計画・構想

システムの構築が必要だ。そこで、**狩猟と食文化を結びつける道を探ろう。**昔流の料理もいいが、ワインが合う洋風にするとか、新しい趣向のイノシシ料理、シカ料理の「B ワングランプリ」祭りをやって盛り上げよう。佐賀、長崎辺りでは、イノシシラーメンなどの取組が始まっている。

３）耕作放棄地には綱付き放牧を進める。（長い綱をつけて一円の雑草を食べさせるもの）。一方、粗放的でもいいから稲作を続ける（緊急事態ゆえ、人手のかからない、この方法を採用する。水田の地下水涵養機能を残す）。秋には稲穂の田に放たれた牛や馬が、藁ごと米を食う風景が見られることだろう。フンは田に還元され、肥えた土地になった翌年には野菜作りに転換する。栄養価の高い野菜が採れ、中国からの輸入など止めて自給率と食の安全が向上する。「エコヤギ羊大作戦」を普及させるために、本の出版や、キャラバン隊を各地に派遣する。

Ⅱ．「美し国の再生 ― 国土美化を強力推進

特に、農山村を念頭に、国土美化を推進する意味を二つの視点から述べたい。まず観光の視点。

観光立国を標榜する上で、観光地、景勝地のほか、**伝統的な農山村風景を守り育てる**必要性はきわめて高い。かつて我が国を訪れた異邦人はなにげない風景に癒されたようだ。ところが今や、膨大な人工林が花鳥風月の土台を失わせる一方で野生動物は異常に増殖し、他方、人様は老化・減少して“田園まさに荒れなんとす”となっている。早急な改善に向けて、津々浦々で、森林の保全、自然林の復元など多様な取組が必要だ。

もう一つは、国土の、**衰えた母性機能の回復**という視点である。たとえば、子供の遊び場は極限まで減少した。子供の笑い声も聞こえない。遊びによって開発されていた子供の創造性は育まれず、そうした国の未来は暗い。幼少時代は輝いていた、三度の食事も忘れるほど楽しかった、そんな国土を子供に与えなければならない。もちろん、子供からの視点だけではなく、定住者、訪問者すべての人びとに対する「美し国」でなければならない。そこで具体的に、理想とするに足る「美し国」を検証する意味で、江戸の末期に、異邦人から、子供の楽園と評された当時と、今日を対比するところから始めたい。

１．環境と人の心の関係を表現した名文

【日本人は 古より美しき自然に育てられて 美しくやさしき詩人たるべく養われたりき】（山路愛山＝明治・大正初期・評論家、歴史家）彼は江戸の残照を観てそう感じた。では当時の風景とは？キーワードは【優しさ、美しさ、自然と社会の非分離】

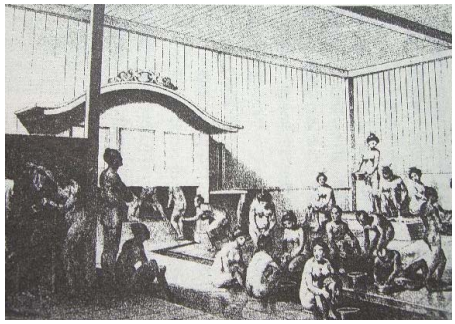
２．江戸時代と現代の比較

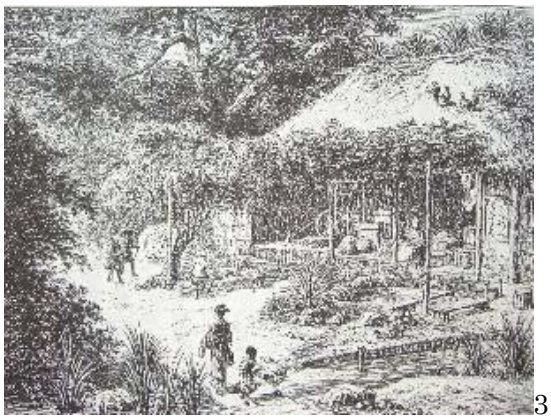
イ．人力車夫の礼儀正しさ、日本人の動物に対する優しさ、赤ん坊の機嫌のよさ、外国人に対する寛容さ、安全さ……etc.（ラフカディオ・ハーンを始めとする異邦人の大方の評価である）

ロ．優しさと美しさの帝国である日本は、地球上のあらゆる国の人びとの平穏な出会いの地となり得る。世界の庭となるのに良い立場にあるのである。（渡邉京二「逝きし世の面影」より）

【次ページの図の説明。１図＝動物に対する優しさ　**２図**＝境界がない自然さ（当時は混浴。明治 22 年には外国人のお節介により禁止）　**３図**及び**４図**＝自然との融合（区別・区切りがない）**】**

1図


2図


3図

4図

３．一世紀後の日本

老化・劣化・精神の荒廃

- 階段の踊り場で、金を出せ！ 応えないので刺し殺した。相手は目と耳が不自由な女性！
- 「女性の心は金で買える！」（ホリエモン）　お金万能社会へ。
- 経済的理由の自殺者 年間３万余人
- 経済社会的疲弊、農村社会、地域共同体の崩壊　etc.

４．母性機能の喪失と回復

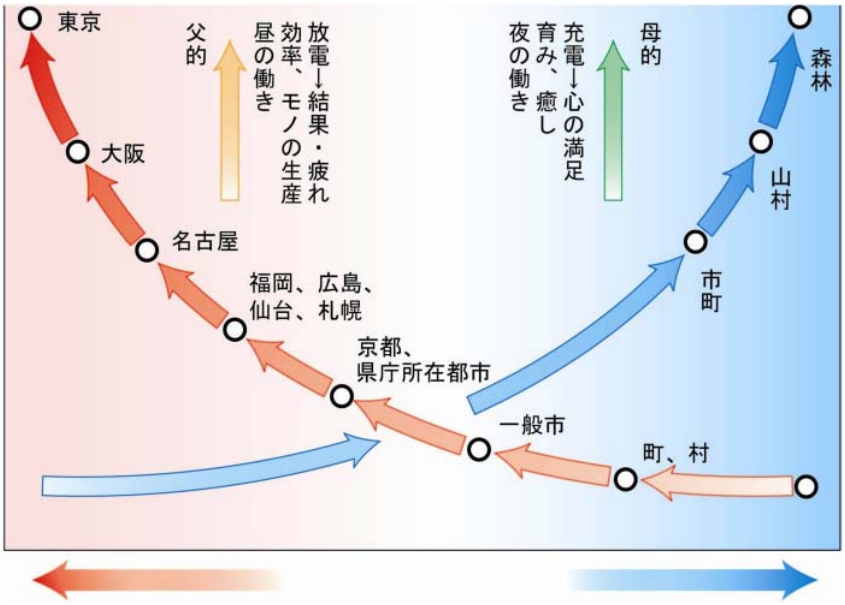
上述の、「老化・劣化・精神の荒廃」は何に由来するか、その理由をここで論じるのは止そう。ただ、少なくとも、失われた山路愛山の世界を回復するためには、ふる里の美しい山河を取り戻すべきとすることに異論はないだろう。しかも、劣化しつつある我が国のこころの成育にとって喫緊の課題たることも。

下図は、**国土には父的働きと母的働き**があって、**両者の調和が必要**だということを示している。特に市場原理が貫徹する近年になって、疲れいや増す「より陰」の方が重視され、母性機能がないがしろにされ続けていることを指摘しなければならない。開いた花もいずれは枯れる。花開くべきつぼみがたえず補給されるようでなければ、凋落する“切り花の文明”の道を辿るだろう。ゆえに、春至れば永遠に再生する“野の花の文明”の再構築が喫緊の課題である。それには、「育みの機能」たる母性機能の強化・復活が目指されなければならない。

再掲：父的働き＝昼の働き。効率、モノの生産、放電 → 結果、疲れ

母的働き＝夜の働き。育み、癒し、充電→心の満足 → 明日へのエネルギー

タイトル：野生動物と共生する、美し国の創りかた、対象地：-、分類：まち全体の計画・構想



← より陰（発散）　　より陽（凝縮）　→

Ⅲ．総合的な解決に向けて

① 農村への回帰の促進　＝　未就業者を中心に、国土美化を推進するため、都市から農村への移動を促し、Ⅰ．とも関連しつつ、農山村にて、永久就業・家庭を築く場を再構築する。真っ当な理念と継続性ある国策の推進が、新しい国土のパイオニアとして彼らに自覚と誇りを持たせ、成功へのスピードを高めることだろう。

② 財源。都市居住者は、一人当たり年間 500 円程度の水源地税を負担する。

③ 愛の勤労「１パーセント奉仕」を実施する。これは、勤労可能な人は、年間、1 パーセントの時間をボランティア活動に振り向ける義務を負う。できない場合は年当たり 1 万円（？）を負担する、というものだ。

④ この活動者を支援して、簡易宿泊施設、より安い高速道路、土日のふる里定期便などを提供し、その他、2 居住地の生活パターンへの支援を充実させる。

⑤ 「美し国づくり」を最上位とする様々な NPO 等活動団体がある。より総合的・広範な運動と効果を目指す“九州　美し夢・美し国づくり”交流会を立ち上げたらどうか。

Ⅳ．終わりに

特に、食糧に関して、安いから、との理由で海外に依存することには、この不安定な世界においては根本的に問題がある。口蹄疫、新型ヴィールス、狂牛病などのリスクの問題、不作時には輸出しない自由を掲げる国々。我々はあまりにも貨幣中心の市場経済にとらわれすぎてはいないか。国土づくりとしてやることはいっぱいある。ただ、その理念と戦略（当然戦術も）がなかっただけだ。我々は大地の恵みに感謝し、多少割高であろうとも、自給体制をかねて構築しなければならない。もっと国土に謙虚になろう！　この心情も本来の国土に立ち返る過程でじわじわと再生されていくことだろう。

タイトル：野生動物と共生する、美し国の創りかた、対象地：-、分類：まち全体の計画・構想